

大学生が捉える「美」のイメージの分析

—— 「美的範疇」を手掛かりにして ——

内田裕子 埼玉大学教育学部芸術講座美術分野

キーワード: 美、美学、美術史、美的範疇、美的概念

1. はじめに

現在、多くの教員養成課程の美術教育講座に美学の教員が配置されていない事実を知る人は、どの程度居るであろうか。美学の教員が配置されていない理由の一つには「教育職員免許法施行規則」〔昭和29年文部省令第26号/施行日: 令和4年4月1日(令和4年文部科学省令第7号による改正)〕、「第1章 単位の修得方法等」の第4条「中学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教科及び教職に関する科目の単位の修得方法」及び第5条「高等学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教科及び教職に関する科目の単位の修得方法」の「備考」がある。何故なら「備考」では、次の表1に示す通り、「美学」を、中学校及び高等学校の「美術」の教育職員免許状取得に要す必須履修科目としていないからである。

表1 免許教科「美術」に関する科目

学校種	備考
中学校	へ 美術 絵画(映像メディア表現を含む。)、彫刻、デザイン(映像メディア表現を含む。)、工芸、美術理論・美術史(鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。)
高等学校	ト 美術 絵画(映像メディア表現を含む。)、彫刻、デザイン(映像メディア表現を含む。)、美術理論・美術史(鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。) チ 工芸 図法・製図、デザイン、工芸制作(プロダクト制作を含む。)、工芸理論・デザイン理論・美術史(鑑賞並びに日本の伝統工芸及びアジアの工芸を含む。)

但し、表1に示した「備考」に記される「美術理論」は、一般に芸術の理論や美の捉え方を学ぶ「美学」と「美術史」を含めた内容を指す。しかも「備考」では「美術理論」に「美術史」が続くため、「美術理論」は「美学」であると解釈出来る。しかし「備考」の表記が「美術理論・美術史」や「工芸理論・デザイン理論・美術史」の様に、各用語を「中黒」で記し、「中黒」が「同種の物の並列の区切り」を意味するため、結果として「備考」の文章は、「美術」の教育職員免許状は「美術史」の科目の単位のみ修得すれば「美学」は修得せずとも取得可能であるとの解釈を成り立たせる。これに加えて「美術理論」の授業科目の内容は、東京大学の「美術論」がシラバスに「美術史学の入門として、日本美術史、東洋美術史、西洋美術史の各分野から、計5名の教員がオムニバス形式で講義を行う。芸術家や美術作品の調査、様式や図像、文字資料を使った検討、鑑定や作品の評価、美術館・博物館における美術展示の実際など、美術史学にかかわる様々な研究方法を概説するとともに、日本・東洋・西洋の古代から現代にいたる主要な研究トピックや国内外での研究動向を紹介する」¹⁾と記す様に、美術史の科目として実施する大学も多い。

こうした状況を反映してか、最近の大学生に「美に関する経験」や「美の定義」を尋ねても、殆どが「美については一度も考えたことが無い」と答える。しかし、近年「アレキシサイミア [alexithymia]」と言われる「自分の感情(情動)への気づきや、その感情の言語化の障害、また内省の乏しさといった点に特徴がある」人が着目され「衝動性や共感能力の欠如など、ストレス対処や対人関係を巡る問題との関連が研究さ

れ」る状況は、児童生徒が「美」について学習する意義の大きさを示している。特に、最近の脳科学研究が明らかにした「自分の内的な感情に気づき・表すことと、自分とは一旦離れた視点（他人の視点に立つ）を持つこと〔自分を客体化できること〕とは密接に関係している」「感情の気付きの問題は共感性・想像力・空想力等と大いに関連している」「自分の感情の微妙な変化に気付き言葉に出来ることは、彩り豊かな精神生活を送りスムーズな対人関係を築くことにも繋がっている」²⁾等は、感性的認識を研究する「美学」の研究に重なるため、そうした観点からも「美」の学習意義は大きいと言える。

以上を踏まえ、本論では、現代の大学生が「美」のイメージを如何に捉えているのかを知るため、多様な学部の大学生に対して「美に関する経験」を問う調査を実施し、その回答を「美的範疇 [ästhetische Kategorien]」の類型に基づき集計し、結果を分析した。また、この調査の結果との比較を目的にした別の調査として、「美学」の教科書を通して「美」の定義や概念を学んだ美術教育を専門とする大学生に対する「{美、快}の{イメージ、定義}」を尋ねる調査も行った。そこで本論では、まず、この美術教育を専門とする大学生に実施した調査の結果を先に示し、次に、多様な学部の大学生に対して実施した調査の結果を示して、更に両者の比較から現在の大学生における「美」のイメージの傾向を検討し、最後に「美学」の学習の必要性を考察する。

本研究に際して実施した調査の{調査内容、回答方法、実施日}は表2に示す。この表2に示す通り、上記2種類の調査は、多様な学部の大学生に依頼した「調査1」と、美術教育を専門とする大学生に依頼した「調査{2, 3, 4, 5}」であり、「調査1」は2回行い、各回、異なる調査協力者に依頼した。なお「調査1」の調査協力者は{5月:104人、7月:72人}の合計176人であり、「調査{2, 3, 4, 5}」の調査協力者は17人であった。

表2 調査内容・方法

結果	調査	調査内容	回答方法	実施日
B	1	あなたが実際に経験した「美」に関するエピソード（美しいと感じた場面や出来事、経験等）と、それを「美」と感じる理由を挙げて下さい。	WebClassへのファイル提出	2021年5月・7月 (各1週間)
A	2	あなたが実際に経験した「美」に関するエピソード（美しいと感じた場面や出来事、経験等）と、それを「美」と感じる理由を挙げて下さい。	調査用紙への記述	2022年7月 (60分)
	3	あなたが考える「美」の定義を記して下さい。		
	4	あなたが実際に経験した「快」に関するエピソード（快いと感じた場面や出来事、経験等）と、それを「快」と感じる理由を挙げて下さい。		
	5	あなたが考える「快」の定義を記して下さい。		

2. 結果A

2-1 「調査2」の結果

上記の通り、本論では「調査{2, 3, 4, 5}」の結果を「結果A」として先に示し、その後で「調査1」の結果を「結果B」として示す。また、調査の結果は、調査毎に表〔表3～表6〕に示し、各表題には調査の概要を記す。そこから、次に掲げる表3には「調査2」の結果を示した。この「調査2」では「調査1」と同じ内容を調査し、その結果を表示する表3の作成に当たっては、予め、調査の回答に記された「美を感じた『対象』」を抽出し、それを手掛かりに分類したため、表3では「対象」の列を設けて、同じ「対象」の回答総数の降順に配列し、且つ関連する対象を近くに配置した。なお、表3の「No.」の総数が「31」で、この数値が調査協力者の「17」を上回っているのは、回答者に依っては、複数の対象を記していたためである。また、表中の『美』に関するエピソードの欄と「理由」の欄には、回答を要約して記した。

表3 調査2:「美」に関するエピソードと理由

No.	「美」に関するエピソード	対象	理由
1	オレンジに染まる朝焼けを見たこと。	空	大好きな友達と朝迄話し、朝4時頃見上げた空が紫とオレンジと水色のグラデーションで太陽が温かく輝いていた。友達と過ごした記憶・時間・空気全てが美しかった。
2	ふと見た空が夕焼けがかった綺麗な紫色をしていた。	空	色の組み合わせ〔色彩〕の妙。
3	快晴日の雲や、大きめの月や星を見た時。	空	人の手が関わっていない自然を見ると、心が浄化されるから。
4	晴れ渡る空と遠くの入道雲。	空	光と影のコントラストが最も高い夏場は、全ての色が鮮やかに見える。また、田舎の田園風景への憧れがあるため、夏の空は理想の風景に最も近付くことができる。
5	夏の空が青々として更に高い入道雲が立ち上がっている様子。	空	主に青と白の2色が際立って見えた。
6	ふとした時の空の色(夕焼けや、夜と夕が混ざり合った様な色)。	空	美しいと感じて写真を撮ろうとしたが、スマートフォンでは上手く撮影が出来なかった。
7	虹が二重に懸かっている空。	空	珍しさに加え、二つの位置関係が整然としていた。
8	誰も居ない中、又は整然とした場で空を見た時。	空+静寂	他に何も考えない状態で際限の無い対象(空)を見た。
9	栃木県足利市の日本一の藤の木(花)。	樹木(花)	空一面(上空)が藤の花に包まれ幻想的な雰囲気。
10	タヒチ島の海。	海	以前見た海と比較し、どの海よりも美しく感じた。
11	グアムでダイビングをした時。	海	自然の雄大さを感じた。
12	ライブのオープニング(好きなアーティストのライブのオープニングとして、吊るされた草花で装飾された輪に各々メンバーが座り、上下に動く演出)。	ライブ(舞台)	白いドレス、花、柔らかい照明、穏やかながら迫力のある歌声の美しさに圧倒された。
13	観劇での役者の身体の動かし方や表情。	舞台	役ではあっても、存在感があり印象的。
14	舞台の或る場面を見て、感動した時。	舞台	声や表情から、悲痛や嫌悪等の多くの感情を感じ取った。
15	舞台上でのドレス等のスカートのひらめき。	舞台	利他的なもの。
16	花火大会のフィナーレ。	花火大会(花火+空)	無数の花火が、間髪を容れず、打ち上げられる様子。簾花火の豪華さ。
17	(ジブリ映画の)久石譲の曲。	音楽	一人の天才と同時代を生きたる幸せを感じる。ジブリ作品をまた見たいと考えるうちに心が浄化され、美を経験出来たという実感を持つ。
18	絵画(2016年開催の展覧会で見た、華やかなドレスを纏うマリー・アントワネットの肖像画)。	絵画	ドレスの華やかさ。
19	ガラス館で江戸切子等のガラス細工を見た時。	工芸品	光の反射と透明なガラスが綺麗であった。
20	美術館へ行って作品を観賞する時。	美術展	芸術作品を見ると、自分に無いものがそこに在り、満たされた感覚になる。
21	技量のある作家の個展を見た時。	美術展	絵の技量に圧倒される。
22	水族館	水族館	アクアリウムと、そこで流れる音楽(BGM)の組み合わせの妙。
23	SNSでイラストを見掛けた時。	仮想空間	逆光やウユニ塩湖 ³⁾ の様な反射が繊細に描かれている。
24	横浜で見た、全長15m以上のガンダムが聳え立つ様子と、それを動かす仕組み。	建造物	これだけの大きさの物を作り、更にスムーズに動かすことが出来る材料の組み方や設計。
25	中型犬	動物	毛並みや骨格。
26	ネットでの友人であった人に、初めて対面して、その友人の容貌が綺麗であった時。	顔(人間)	顔の造形の美しさ。
27	アリソン・フェリックスの走り。	身体(人間)	無駄が無く、滑らかで、苦しさが感じられない。
28	自分の生命を賭して誰かを救おうとする場面。	関係(人間)	利他的行為。
29	皆で協力して目標を達成する場面。	関係(人間)	協力的行為。
30	誰も居ない部屋、騒音も無い朝に目覚めた時。	静寂(室内)	ずっとこの場に居たいと思った。
31	騒音の少ない自然の中に旅行に行った時に、言葉に出来ない美を感じる。	静寂(自然の中)	元々、自然等が作り出す風景や音に心動かされるのは、自然な人間の心情と感じる。時々、自然の持つ威厳に若干の恐怖を覚えながらもそこに美を見出す経験をするが、理由は明瞭ではない。

表3に見られる通り「対象」は、総数が多い方から「自然」〔空、海、樹木〕→「芸術品」〔舞台、絵画・工芸、音楽、構造物、イラスト〕→「生物」〔人間〔顔・身体〕、動物〕→「関係」〔利他、協力、静寂な場所〕である。こうした対象には、回答者の興味や趣味・特技に関わる内容が含まれると考えられた。更に、

理由に記された言葉には {色・色彩、心の浄化、理想、憧れ、無駄の無さ、造形、豪華、雄大、珍しさ、友達、整然、圧倒、無数、無、技量、満たされた感覚、組み合わせの妙、繊細、居心地の良さ、恐怖、不明} 等があり、また、対象から美を受容した身体器官としては、目が殆どで、僅かに耳もあったが、その場合も、目からの情報に耳からの情報が付随するという回答であった。

なお「自然」のみを美しいとする回答が多く見られた一方で、「自然」と「自然に触れる際の本人の状態」とが連動して自然を美しいと感じたとする回答もあり、また、自然そのものに美しさを感じたという回答においても、美しいと感じた理由に「自然物に現れた異なる色の組み合わせ」を挙げた回答がある等、自然を俯瞰した回答と、自然の細部に着目した回答の両者が見られた。同様に「人間」を対象にした回答においても、人間そのものを美しいとする回答の他に、協調し合う人間等の「他者との関係」や「他者のために行動する人間の姿」を美しいとする回答が見られた。これらの回答から「自然」でも「人間」でも、単独で捉える場合のみならず、関係に着目して美しいと感じる場合もあるのが分かる。

2-2 「調査3」の結果

次掲の表4に示した「調査3」では、回答者自身が考える「美の定義」を尋ねた。但し、表4の「No.」は、表3の「No.」とは関連せず、表4では、傾向が似た回答を近くに配し、上から順に「No.」を付した。

表4 調査3:「美」の定義

No.	定義
1	人間が豊かに生活するために無くてはならないもの。「美」は確かに人を不幸にする概念でもあるが、スタンダードが「美は幸福の約束」と言った様に、人の心を豊かにする力を持つ。万物に内在するものであり、それを「美」と捉えるかは人に依る。絶対的な美しさはこの世には存在しない。
2	一瞬でも、一生でも、見た人の心を「動かす」もの。 →「動かす」要因: 幸せにする、記憶に残る、「綺麗だ・素敵だ」と思う等。(但し、他にも人によって要因は多々ある)。 →上記の要因が二つ以上当て嵌まるものが美。(一つでは美以外にも当て嵌まるため。例:「暴力的でインパクトのあるもの」は衝撃で「記憶に残る」が美ではない。)
3	何か物事に対峙した時に、自身の感性が、どの様な方向であれ動くこと。
4	外部から感じ取ることが出来(目や耳等から)心をプラス方向に強く揺さぶるもの。再度見たい(聴きたい)と思えるもの。
5	心が動く{もの、こと、現象}。実体を伴うものもあれば「絆」や「作法」等、実体を伴わないものもある。必ずしもプラスであるとは限らず「悲しい」「悔しい」の場合もある。
6	①感動する・心が浄化されるもの: 掛け替えのない要素が強い。その瞬間においては掛け替えのない存在で、心に良い変化を起こすもの。 ②嫉妬する・嫌気が差すもの: 形が整っているが故に咄嗟に「美しい」と表現したが{端正、綺麗}に換言出来る。
7	直感的に美しいと感じることが出来るもの。言葉では言い表せなくとも、大きく感情を動かされるもの。言葉で説明されても自身の心が動かされなければ美ではない。大衆的に「これは美である」と言われているものは、本来の美ではない。
8	心を強く動かすもの・感動するもの。ずっと見ていたいと思うが、遠く、触れてはならない気がするもの。怖さにも近いもの。
9	多くの人が心動かされ、世間的に見て価値のあるもの。
10	一瞬で心を動かすもの。他のものがインプットされない、そのもののみしか感情が入らなくなるもの。
11	全体の中でハッと目を引くもの。
12	自分が「良い・素晴らしい」と感じたもの。自分の中の理想が形になったもの。
13	安らぎや憧れ、そこに向かいたいと思わせられる魅力。主観的な概念、畏敬。
14	色覚的に鮮やかで目を引くもの。物理的や幾何学的にバランスが取れているもの。
15	自分には無いもの。自分から遠いものに抱く感情・感覚。
16	それぞれが互いを邪魔することなく、際立たせていく状態。個としての存在が感じられるもの。
17	その時の景色・気持ち・立場等において、総合的に他のものと比べた時に、より心に残っていること。

表4に示す通り、美を「心・感性を動かす〔感動〕もの」と定義した回答が最も多かった。但し、感動する場面に居合わせるのは一人の場合もあれば大勢の場合もある上、感動する時間は一瞬〔直感〕の場合も長時間〔一生〕の場合もあり、更に、動かされる「心の方向」はプラスもマイナスもあった。以上を整理すると、美を感じる際に心が向かう方向は{プラス、マイナス}、心が動かされる時間は{一瞬、一生}、美を感じ

じた人は{幸福、不幸}になり、美を感じる場面には{一人、大勢}が居る、といった極端な回答が現れた。

その他、美を感じて心が動いた結果、人は{幸福になる、不幸になる、安らぎを感じる、そこに向かいたいと思わせられる魅力を感じる、ずっと見ていたいと思う}等、気持ちの変化が生じる点を指摘する回答や、この変化が原因となって、人は美に対して{憧れを抱く、触れてはならないと感じる、豊かな生活をするために欠かせないと思う}等、「美が持つ力」について言及する回答が見られた。また「美の所在」に関わる回答には{他と比較して優れたもの〔心に残るもの〕、万物に内在するもの〔絶対的な美しさは存在しないもの、自分には無いもの〕、全体の中で際立つもの〔色覚的に鮮やかなもの〕、個としての存在が感じられるもの}等が見られた。

2-3 「調査4」の結果

表5には『快』に関するエピソードを挙げる。但し、表5に表した「調査4」においても、表3の「調査2」の『美』に関するエピソードの回答と同様に、複数種類を記した回答があったため、表5では27通りの回答を示す。また表5の掲載方法も表3と同様に、調査の結果の集計の際、回答に記された快を感じた対象を抽出して類似の対象を近くに配し、且つ、類似の対象の総数の降順に並べた。なお表5の「No.」も、他の表の「No.」との関連は無い。

表5 調査4：「快」に関するエピソードと理由

No.	「快」に関するエピソード	対象	理由
1	食べている時・寝ている時。	衣食住	心地好い満足感。
2	プラネタリウムを見ている時。	プラネタリウム	寝ながら星を見ることが出来る快適さ。
3	眠りに落ちる瞬間。起きてから、二度寝に入る直前迄。	睡眠	心地好い。
4	暑い中、帰宅した後で入る25度程度の室内で眠る時。	空調	心地好い。
5	適度な室温で、犬を抱き、漫画を読み、好きな食料が手に届く状態。	空調	心身の快適さ。
6	家族で入る温泉。	水上の温泉	子どもの笑顔や反応・会話。
7	静かな音楽を聞いて入浴する時。	湯船	心身の快適さ。
8	北海道野宿旅で雪の中、歩いた末に見付けた3日ぶりの風呂。	風呂	心身の活性化。
9	幼稚園で、芝生の土手を段ボール楯で滑走した時。	草スキー	爽快感を味わった。
10	夏の朝早くに起きて小学校へ行き、ラジオ体操をする。行く迄の眠気も朝日を浴びながらの運動によって何処かへ行き、爽やかさの残るあの時間。	ラジオ体操	心身の活性化。
11	旅先で朝早く起きて余り人が居ない時間に良い景色の場所に行った時。	早朝の散歩	良い景色と風が気持ち良いと感じた。
12	高校2年時の部活動で、出場を目標としていた大会に勝ち進み、大会本番の朝の宿舎での最後の通し練習の際、全員の想いが一つになり、理論では語れない素晴らしいハーモニーを奏で、演奏中に、教員を含めて全員が泣き出したこと。	演奏	その美しい場面の一要素であることが出来た時の感情。
13	良い演奏が出来た時。	演奏	物事を成し遂げようと決意し、それが達成された時。
14	否定されているかもしれないと思った「こと」が受け容れられた時。	受容された考え	心が楽になる。(否定されたくないとの思いが叶ったため。)
15	・同人誌即売会で作品を褒められ差し入れを貰った時。 ・ゲームで「野良〔初対面〕」の味方に「強い」と言われた時。	賞賛	自己肯定感。
16	・長期の活動が評価され、礼状を貰った時。 ・自身の作品が褒められた時。	賞賛	報われたこと。
17	ソフトボールの試合でホームランを打った時。	ホームラン	打った瞬間の感触と、打球が伸びて行く様子が気持ち良かった。
18	本を最後迄読み切った時。	読書	長く集中していた時間から解放された時の解放感と、数百頁の本を読んだ達成感、本の内容を振り返る時間の有意義さ。

19	鯡を捌いて思った通りの「なめろう〔沖膾〕」が出来た時。	調理	食べた瞬間、想像していた味になっていた。
20	逆境に立たされた主人公が、最後に困難を乗り越えて人生の新たな第一歩を歩み始めるドラマ。	ドラマ	逆境を乗り越えること。
21	・ドミノ倒して綺麗に失敗せずに全てが倒れる様子を見る時。 ・自らが設けた規準通りに、本やCDを並べる時。	整然	目標への達成感を伴う行動。
22	小動物の柔らかい毛。	兎の毛	触り心地の好きさ。
23	猫や犬が戯れている動画、ペンギンのショーの動画。	動物の動画	癒される。
24	解答が困難な謎解きに成功した時。	謎解き	抱いていたモヤモヤが一気に無くなる気分。
25	ライブに行った時。	ライブ (生演奏)	音楽を身体全体に浴びて、嫌なことを全部忘れられた。歌詞に救われた。{ライブに行きたい、好きなアーティストに会いたい、音楽を浴びたい} という欲求が叶った。
26	海の広さと波の音。	自然	時間に追われず、風が心地好い所で、昼寝が出来る。
27	疲労が溜まっていた時、仕事を全て済ませ、愛する人たちに会いに行った時の楽しい気持ち。	仲間と過ごすこと	心地好く楽しい空間。

「対象」に着目して表5を見ると、上から{衣食住、行為〔運動・演奏・制作・競技・調理・読書・謎解き〕、賞賛、観賞〔ドラマ・ライブ・自然〔秩序〕〕が並んだ。また、無条件にそれらの対象に身を置いた時や経験した時に快を感じる場合もあれば、自身の心身の不調である{疲労、不快、不安、不満}が解消された時に感じる快もある。更に、独りで感じる快と他者と共有する快があった。

2-4 「調査5」の結果

次の表6には、調査5の「『快』の定義」の回答を挙げる。表6では回答の「要約」を右欄に記し、この「要約」を観点に類似の回答を近くに配して、その回答の総数が多い方から降順に「No.」を付けて表した。

表6 調査5:「快」の定義

No.	定義	要約
1	瞬間的に良さや美を感じ取ること。	瞬間的な「善さ」を感知
2	心の動き。美を感じている瞬間は同時に快を感じている(純粋な場合に限る)。安堵の様なもの。	美と同時に出現する安堵感
3	規則性があるもの。想像していた通りに動いていたり、その状態になっていたりするもの。美より緩やか。 そこに居たい。その場に居て反発せずに溶け合う。居心地が良くスッキリする。	美よりも緩やかな状態 (包容感のある)居心地の良さ
4	美しいもの、楽しいもの、気持ちの好いものの中に自分が居ること。自分が身を以て感じるもの。	身を以て感じる居心地の良さ
5	「美」よりも作画的で、物事が行われて行く中で得られた快感。	自身の行動に伴う良い感情
6	その人の体験により、感情がプラスに動くもの。	体験に基づくプラスの感情
7	プール授業の後の教室に流れる風の様、お昼過ぎに未だ太陽がポカポカ暖かい時こうとうとと眠ってしまいそうな微睡の中に居る時の様な「心地好いもの」。	心地好さ
8	目の覚める様な新鮮さを自らで感じられるもの。心地好いもの。	新鮮さに伴う「心地好さ」
9	心地好いもの。緩やかな感情。そこに居たい、触れていたいと思うもの。	触れていたい「心地好さ」
10	何とも言えない心地好さ。自分と環境が反発し合わず、溶け合って行く様な感じ。	包容感を伴う「心地好さ」
11	自分の欲望が叶った(発散出来た)時の感情。 ・不安を無くしたい→不安が無くなった時に感じる感情。 ・欲しいもの→手に入れた時の感情。 自分が楽しいと感じる気持ち。(「欲望」に拘らず、純粋に喜ぶ「喜・嬉」とは異なる。)	ストレス解消
12	プラスの感情。ストレスが緩和されたり、無くなったと感じたりする感情。	ストレス緩和・解消
13	不快の逆。その時々で逃れたい、解放されたいと感じるストレス源(ストレスサー)から解放された状態。	ストレス解消
14	五官で感じる事が出来て、ストレス発散になる。	体験に基づくストレス発散
15	心の霽れ晴れ、スッキリすること。拘束された状態から解放されること(ポジティブ)。	解放感
16	心が晴れ晴れする。思わず弾みたくなる(なってしまう)。表情も柔らかく(自然と)にっこり。	爽快感
17	自分が大切にしたいと思って行動した時。他のものと比べてより心に残っていること。	印象深さ

表6のNo.1～No.5の「要約」にある通り「美」との比較に基づき記した回答が複数見られた。それらの回答における「瞬間的に美を感じ取ることが快、美を感じる際に同時に感じる気持ち〔安堵感〕、美よりも緩やかな状態」という表現は、快が美と切り離せないことを示す。また、表6には、多様な体験を通して、感情をプラスにするものを快と捉えた回答が見られるが、これらは、美においては、それを受容するのが主に視覚若しくは聴覚に基づく体験であったのと異なる。更に、表6では、快を「心地好い、居心地が良い」とする定義が見られるが、その理由には、快が「新鮮さ、触れていたい、包容感」等の感情を引き起こすためであるとしている。また「ストレス解消後」の様な「自身が抱える懸念等を払拭した後」に抱く解放感や爽快感等の、苦勞して何かを達成した代償として味わう喜びや安心を快と捉えた回答も多く見られた。その他、快には、自身の「大切にしたい」との想いに基づく行動が関与するため、その特別な想いと行動の相乗効果で印象が深くなる点を快の根拠に挙げた回答もあった。

以上の通り、美術教育を専門とする大学生の回答には「美学」の教科書で理解した内容を反映した回答もあった。なお彼等に対しては、美学の文献を読む前にも「美の定義」を回答する調査を行ったが、その結果では「美」を「こだわり、恋、無意識に良いと思うもの、心、受け取り手の感じ方から決定されるもの、自分の好みとは別」等と捉えた回答があり、その時と「結果A」の回答に変化があった人もあれば無かった人もあった。但し、その時の回答には「結果A」では見られなかった「美」を「やばい〔怪しい、驚く、面白い、楽しい、美味しい、感動する〕もの」とする回答があったが、これについては後段検討する。

3. 美の分類方法

次に「調査1」の回答の分類に先立ち、分類のための観点を用意するため、本章では「美的範疇」や「美的概念」等の美学における美の分類方法を検討する。

「美的範疇」は、美学史において「美」の多様性を示す数種類の類型を指すが、こうした「美的範疇」に対して20世紀中頃に提唱された「美的概念〔aesthetic concepts〕」⁴⁾の方は、芸術表現の多様性に対応するため無数の概念を含み、それは18世紀以来、形や色の様に「視力さえあれば捉えられるもの」とは区別された「趣味」〔特別な能力がなければ見分けられないもの〕を指す⁵⁾。但し「美的概念」の「美的」は、正確には「感性的」と呼ぶのが適しているとされ、その理由は「感性的」であれば「すべての具体的な経験に関係している」⁶⁾からと言われる。なお「美的範疇」に関しては、哲学的に「範疇」の語を使用し始めたのはアリストテレス〔Aristoteles, 紀元前384-紀元前322〕とされるが、そうした「範疇」の性質上、各類型に適合する美がある一方で、その諸類型は「重層している事が多く、現実には複雑な構造と内容を持っている」⁷⁾ともされる。

なお、上記を踏まえ、本研究で行った調査では、調査協力者が、普遍的な「感性」に基づく「美」を相対的に考えられる様に、個人的な「感性」に基づく「快」も同時に示し、「美」と「快」の両方のイメージと定義を尋ねた。

3-1 「美的範疇」と「美的概念」

まず「美的範疇」であるが、これについては「美の異態として最初に論題に挙げたのは崇高(the sublime)であった」⁸⁾と言われたり⁹⁾、18世紀末に登場した「ピクチャレスク〔the picturesque〕」は「18世紀末の英国において一時的に提出された美的範疇に留まってしまった」¹⁰⁾と言われたりする通り「美的範疇の議論の誕生は、感性的な価値として、美の他に崇高や優美などがある、という認識に由来するもので、美の独占状態が崩れてゆくことを示している」¹¹⁾とされる¹²⁾。但し、バーク〔Edmund Burke, 1729-1797〕の「美的

範疇」に「崇高」を加えた考え方に対しては、美術作品の「美」には無い「自然が持つ偉大さ」に着目して、「美」と「崇高」とを区別した点が西洋哲学的であり、その様な区別は東洋哲学には無いとされる。

他方、感性を共有する範囲を「人類」から狭めて「民族」や「文化」に限り、その範囲で共有する感性に基づいた「美的範疇」の類型があるとする考え方がある。その考え方に依ると、中国においては『済其不及、以洩其過』すなわち『その過ぎたるを捨て、もってその及ばざるを補う』概念である「中和」¹³⁾や「中国の人性的精神および高貴・超俗・幽玄の美を内包した」¹⁴⁾「気韻」¹⁵⁾があり、同様に日本には「侘び」¹⁶⁾や「寂び」があるということになる¹⁷⁾。

また、国語辞書や百科事典では「美的範疇」を「本来的には一つである美を、いくつかの特殊的類型（崇高・優美・悲壮・滑稽など）に分けた概念」¹⁸⁾と解説したり「美とそれに類する諸概念（優美、崇高、わび、さび、など）の総称。美の多様で特殊なあり方を特徴づける類型概念であり、美的対象を述語づける形容詞を名詞化したもの」¹⁹⁾と記したりする。他方、専門辞書の『美学の事典』²⁰⁾では「美的範疇」を「美的カテゴリー」とし「美的経験の対象は美に限定されるものではなく、崇高、優美、悲壮、滑稽等多様な広がりを示すが、これらをそれぞれ独立した美的カテゴリーとして対自的に規定することによって体系的に分類したものが『美的範疇論』である」²¹⁾と記す。

こうした「美的範疇」と前述の「美的概念」の違いについて、佐々木健一〔1943-〕は「美的範疇も美的概念も、『美しい』に類する形容詞の束であるという点では、同じです。しかし、前者が美、優美、崇高、悲劇的、喜劇的、醜などごく少数の概念からなるのに対して、後者は前者を含むものの、無数といってよい形容詞の集合です。すなわち、陰気な、厳粛な、センチメンタルな、悲しい、メランコリックな、激しい、熱烈な、優しい、堅苦しい、統一性のある、ばらばらの、調和した、混沌とした、エレガントな、どぎつい、卑俗な、驚くべき、可愛い、神秘的な等々、という具合で、しかもこのリストは開いていて、いくらでも付け加えることができます。美的範疇と見做されてきた形容詞は、文句なしに美的概念です。しかし、その特権的な位置は、もはやありません」²²⁾や「美的概念が表しているのは、少なくとも質感に関して、規範的な枠組みがなくなってしまった自由な藝術」²³⁾の状況です」²⁴⁾等の様に解説する²⁵⁾。

なお、ここで述べられる「自由な藝術」の受容に関しては、現在の大学生を見る限り、過去の大学生と比べてみても、抵抗無く行われている印象がある。その証拠の一つが、現代の大学生が使用する前出の「やばい」という言葉の流行である²⁶⁾。「やばい」は、平安時代以後に見られる「いとをかし」の現代版とも言われる言葉であるが、その理由は「をかし」が「美的理念」や「美意識」を意味する「対象を興ありと思う明るい快適な感情を主とすることば」であり「美として優美に近いものを表す場合と滑稽を表す場合とが両極として考えられるためである。また『あはれ』が対象に思い入った深いしみじみとした感動であるのに比べて、『をかし』は概して対象を外部から余裕をもって見て、そこに興味を覚え快感を誘われて喜ぶような面がある」²⁷⁾点も、その理由である。即ち、若者が使用する「やばい」の言葉は、概して「最高である、すごくいい」²⁸⁾を意味するが、その一方で「全ての感情を表現出来る言葉、想定した範疇を超えた際に若者が発する言葉、あらゆる意味を含むため前後の文章からの意味の推察が必要となる言葉、ネガティブとポジティブの対極の意味を持つ言葉、感情が激しく揺さぶられる意味を表す言葉、程度が甚だしい様を示す言葉、古語の「いみじ」と同義、主観的な感覚に基づいた判断に使われる言葉」²⁹⁾と解される点から、上記の様な「をかし」に近い概念と捉えることが出来る。

「美的概念」が形容詞の束であるとしたら如何なる形容詞も「美術概念」と言えるが、そうであれば、美に関わる形容詞を総称する「やばい」³⁰⁾は「美的概念」となり、そこから逆説的に「やばい」の言葉が流布する現代は「自由な藝術」の最先端である「現代の美術作品」が受容され易い社会であると言える。また、感性が個人に由来するという考え方が定着した現代は³¹⁾、個人が多様であるのと同様に感性も多様である

と認める土壌が出来ており、或る人の感性がその作品を良いと捉えれば、その人にとってそれは美術であると認める風潮が浸透している点も、現代が「自由な藝術」を受容し易いことの証左と言える。

但し「やばい」については、エドワード・T・ホール [Edward Twitchell Hall, Jr., 1914-2009] が提示した「高文脈 [ハイコンテクスト] 文化・低文脈 [ローコンテクスト] 文化」の分類法では「高文脈」に属する言葉と見做され、従って、文脈への依存が高い言葉となる³²⁾。この説を敷衍すると「やばい」は「可愛い」に似て、対象の本質を把握せず、単に甚だしい反応を「やばい」と形容しただけであり、本来行われるべき、対象を洞察して言葉にする働きを怠ったために発した言葉となる。そのため、この説に依れば「作品」を見て驚いた故に「やばい」と表現はしてみたものの、その行為は必ずしも対象を「藝術」と捉えている訳ではない、と見做される可能性は否めなくなる。

3-2 「美的」に関する諸概念

上記の「美的範疇」と「美的概念」の他にも「美的」を語頭に有する言葉は多数あり『ブリタニカ国際大百科事典』では〔観照、感情、享受、経験、静観、対象、直観、判断、理念、実存〕の10種類の言葉が見られた。表7には、これらの「言葉」に「美意識」を加えた11種類を挙げ、事典に記された「意味」を抜粋し、更に「意味」の記述においては、本論に関わる言葉を太字で記した。

表7 「美的」を語頭に有する言葉とその意味

言葉	意味
美的観照	美意識の一側面。一般に、芸術創作が美意識の能動的側面であるとされるのに対し、 美的観照 は、 美的享受 と同様、美意識の受動的側面であるとされる。 美的観照 と 美的享受 との違いは、前者が対象の直接的受容活動であるのに対し、後者が前者の作用を前提して行われる受容活動である点にある。 美的観照 は自我と対象との間に一定の距離を前提とするところに成立し、しかもそれが対象に対する無関心性を前提する点において、認識論的活動や実践的活動と区別される。この無関心性を強調する場合は、 美的観照 はむしろ 美的静観 といわれることが多いが、解釈の能動性を強調した考え方もある。
美的感情	美意識あるいは 美的体験 における感情のことをいい、立場によって説が分かれる。感情移入美学は美意識の構造を感情移入の原理で解明するが、大別すると、現実感情説、感情表象説、および両者の総合の立場に区別される。現実感情説は、感情移入の過程が現実的感情にあると主張するもので〔略〕感情表象説は感情移入過程の直接性を否定し、感情移入過程が感情の表象にあるとするもの〔略〕。
美的享受	美意識の一側面。一般に、芸術創作が美意識の能動的側面であるとされるのに対し、 美的享受 は美意識の受動的側面であるとされる。この能動と受動の差は相対的なものであり、たとえばリップス [Theodor Lipps, 1851-1914] らの感情移入美学では、 美的享受 は主観化の側面からばかりでなく、価値感情の客観化の側面からも考察された。
美的経験	一般的にいて、 美意識 とはほぼ同義であるが、哲学的美学では、 美意識 という言葉が心理学的美学でいう 美的態度 における意識過程と混同されるのを避けて、 美的経験 という言葉を使うことが多い。その場合、 美的経験 とは美的価値経験の意である。 美的経験 は、他の経験と同様、客観的側面と主観的側面をもち、本質的契機としては 美的直観 と 美的感情 から成るとされる。したがって 美的経験 の考察はこの両契機から考察されなければならないが、立場によって、相対的な程度においてではあるが、いずれかの契機への傾斜が認められる。
美的静観	美意識 の一側面で、対象への無関心性を根本的に特徴とする受容活動。近代において、 美的静観 は無関心性の観点から考察したのはカント [Immanuel Kant, 1724-1804] であり、彼は 趣味判断 が対象の実在に対して関心を欠いている点において、静観的であるとし、静観性を美の自律的領域を特徴づける重要な特性の一つであるとした。
美的対象	美的対象 はただそれ自体で成立するのではなく 美意識 を相関者として初めて成立する。美的対象論は立場によって説が分かれるが、美学史的には、近代において、 美的対象 を形式の側面において考察する形式美学と、内容の側面において考察する内容美学に大別された。〔略〕現代では、美的対象、ことに芸術作品は存在様式、作品構造の側面において現象学的、あるいは存在論的に考察される傾向が有力である。
美的直観	直観のさまざまな意味に応じ 美的直観 の意味も異なるが、基本的には感覚的にしる知的にしろ美を直接に認識する作用をいう。その知的側面を強調し 美的感情 と対立させる学説もあるが、一般には本来直接体験である 美的経験 の本質的契機を指すものとして用いられる。
美的判断	二つの用法で用いられる。(1)カントの「判断力批判」においては、合目的性が快、不快の感情によって主観的に捕捉される場合の判断であり、ときに 趣味判断 とも呼ばれる。この場合の合目的性は美と崇高を含む。先験的美学における 趣味判断 はすべてこの意味である。(2)〔略〕感情移入美学においては、 美的判断 とは 美的享受 に付随し、対象そのものの価値に対する判断をいう。これは(1)の意味とは異なりあくまで受動的判断である。
美的理念	美学上の用語で一般には美の究極において志向される理想的観念をいう。これは単なる主観的表象や客観的法則によってとらえられるものではなく、すべての 美的創造 や 美的享受 の形而上学的根拠として説かれることが多い。

美意識	美、醜の評価が成り立つ対象一般に対する精神の活動ないし態度。それゆえ 美的なもの の創造、観照、批判を含む情緒的、直観的判断力を主体とし、ときに 美的経験 と同義に用いられる。経験心理学的には美意識は美的事実を内容とする意識をさし、〔略〕先験心理学的立場では、美の生産を行う特殊な統一的意識をいう。存在論的美学では、理念としての美の認識を頂点とし、感覚的快美感を底辺とする構造の意識全体をさす。
美的実存	キルケゴールの用語。 倫理的実存 、 宗教的実存 とともに人生の三段階の一つ。人間は 美的実存 において、有限なもの、時間的なもの、すなわちこの世的なものに人生の価値を認め、あたかも無数の恋人を替えつつ快楽を追うドン・ファンのような生活のように、無数の可能性とたわむれ、その享楽に生きようとするが、やがて人生のむなしさを覚えて挫折し、 倫理的実存 の段階に向かうとされる。

表7の最後に挙げたキルケゴール [Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855] の言葉「美的実存」は、人間の生き方における未熟な段階を指すが、それが意味する通り、本論で考察する「美」とは異なる概念を持つ言葉である。そのため「美的実存」は、美術教育が育成を目指す「美的人間」とは異なり、その場合の「美的人間」は、キルケゴールにおいては「宗教的実存」に近いと考えられる。しかしその一方で、見ること（観照）の分析を通して「美的」を考察したキルケゴールが「美的な生き方」を意味する「美的実存」に関して行った解釈は、美術教育が主題とする「美的人間」を再考するのに有意義であると考えられるため、5章で触れることにして、本章では「美的実存」を除き検討する³³⁾。

以上に基づき「美的実存」を除いて表7を見ると、各言葉の意味同士に重複する部分が多いのに気付くが、それは、美に関わる感性が多面的で、解釈や解説が難しいことを示す。また、表7に示した以外にも「美的」を含む言葉はあり、家庭向け国語辞典の『広辞苑』には「美的環境」「美的印象」が掲載されていて、各々「芸術制作や芸術鑑賞に関与する自然のおよび社会的条件の総体」「美しさについて受ける印象」と説明される³⁴⁾。なお「美的」に関する研究の例としては、「美的印象」について、予め「印象評価語」を〔感動、力強さ、爽快感、美的感覚〕と決め、花火の構成要素〔色、光、形、音〕と美的印象との関係を、これらの言葉を手掛かりに検証する内容がある³⁵⁾。

3-3 「美的」諸概念の整理

次の図1では、表7に示した「美的」を含む各言葉の概念の複雑さを可能な限り捨象して、各言葉の関係を模式的に示す。

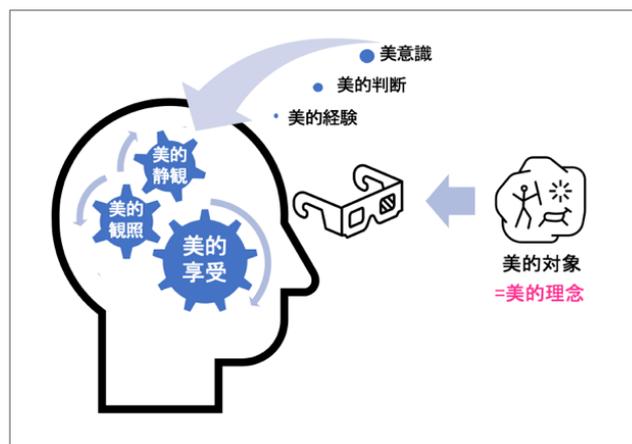


図1 各種「美的」概念の関係図 [案]

図1を解説すると、図の右から、自然美も芸術美も含めて「美的理念」[ästhetische Idee=構想力の表象]を体現した「美的対象」を人間が受容する際、人間は〔美的直観、美的感情〕に基づく「美意識〔美的

判断、美的経験」の働きにより「美的観照〔美的静観〕」を通して「美的享受」を行う。また、この過程を逆に辿り、受動的経験である「鑑賞」の過程を示した図1を、能動的経験である「表現」の過程として見ると、矢印の方向を右向きに反転した最終段階に「美的理念」を体現した「美的対象」即ち「美的創作」が出現する。

この図を手掛かりにすると、美について検討する際の観点には{<1>美的対象、<2>美意識、<3>美的享受}即ち{<1>美的な対象が何か、<2>美的な対象を美的であると捉える人間の判断能力、<3>美的対象を享受する際の人間の享受方法}があると考えられる。但し、その中の「<1>美的対象」及び「<2>美意識」について、「美的範疇」に「崇高」を加えたパークと同時代を生きた『百科全書』の編纂者ディドロ〔Denis Diderot, 1713-1784〕は、次に記す通り「関係」の観念を喚起し知覚する点が重要であると言う。ディドロは『百科全書』第2巻〔1752年刊〕に執筆した「美」の項に次の様に書く。「私は、自分の外部においては、自分の知性に関係の観念を喚起できる要素をそれ自体のうちに含むものすべてを美と呼び、私との関係においては、この観念を呼び起こすものすべてを、美と呼ぶ」³⁶⁾。また、その関係とは「ある存在ないし性質が、別の存在なり性質を前提する限りにおいて、それらを考察する知性の働きを指す」³⁷⁾。「ゆえに、あるものが、それ自体に見受けられる諸関係によって美しいと言う場合、私は、想像力がその存在に移し替える観念上の、ないし架空の関係などではなく、そのもののうちに実在し、知性が感覚の助けを借りて見つけ出す実在的な関係のことを述べてい」て「関係こそが美しさを構成するのだと言いたい」³⁸⁾。加えて、ディドロはこうも言う。「ある存在は、その性質によって、あるいは、我々のうちにどれだけ多くの関係の知覚を引き起こすかどうか、また、どのような性質の関係を引き起こすかによって、きれいだったり、美しかったり、より美しかったり、非常に美しかったり、あるいは醜かったり、低俗だったり、卑小だったり、偉大だったり、高貴だったり、崇高だったり、極端だったり、愉快だったりする」³⁹⁾。

他方『美学の事典』では、美的カテゴリー〔美的範疇〕を「崇高、優美⁴⁰⁾、悲壮、滑稽、フモール」「幽玄、あはれ、さび」とし「美的範疇が分類概念であることからその数はおのずから限定されたものとなるのに対し」て、美的な「対象のもつ／もちうる属性（性質）」を意味する「美的特性〔aesthetic properties〕」を上記の「美的概念」と同義と捉えた上で⁴¹⁾、現代の「可愛い」等の多様な美的特性を含めて、その特性を表す言葉は「美的用語」〔aesthetic terms〕と呼ぶと記している⁴²⁾。但し「美学の世界での美的カテゴリーは、普通、美と崇高やあはれや幽玄などの美的なるものの分類、つまり各種の美意識を意味する」⁴³⁾ともあり、この解説は、図1の解説に記した「<2>美意識」を「美的範疇」と捉えるのを可能にする。

その他、美術作品が有する精神的価値に由来する「美的範疇」以外にも、日常生活に認められる「美的範疇」があるとして、日常生活を{経験・文化・言語由来、身体由来、日常生活の中の芸術体験由来、自然・風土由来、日々の暮らし由来}に分類し、そこでの「美的範疇」には「いき、かわいい、渋味、劇的、はなやか、はんなり、晴れやか、しめやか、淑やか、しみじみ、しみる、しめる」⁴⁴⁾を挙げる解説もある。なお、今回の大学生への調査の結果においても、この解説の様に、美術作品に関する美と日常生活に関する美の2種類の回答が見られた。

4. 結果B

4-1 「調査1」の分類のための「美」の類型

以上の検討を礎に、本章では「調査1」の結果を分類するための観点を作成し、その観点に基づき「調査1」を分類する。そこでまず本節ではその観点となる「美」を分類する際に用いる「類型」を決める。

アリストテレスは『詩学』において「(1)まず、再現(模倣)することは、子供のころから人間にそなわった自然な傾向である。しかも人間は、もっとも再現を好み再現によって最初にものを学ぶという点で、他の動物と異なる。(2)つぎに、すべての者が再現されたものをよるこぶことも、人間にそなわった自然な傾向である」⁴⁵⁾と述べたが、再現や模倣において、その作品を愛でる点が美に通じる所から、この考えを敷衍すると、美に対する人間の反応は、全ての「人間にそなわった自然な傾向」と言える。そこから「調査1」の回答の分類には、「美」への反応は普遍的であると捉えて「美的範疇」を用い、仮に普遍的な反応と認められない回答があった場合は「美」ではなく「その他」として分類することとした。

但し「美的範疇」の類型に挙げられる言葉は文献によって区々で、統一した見解が見付けられなかったため、本論では独自に次の14類型を「美的範疇」とした。それが{崇高、優美、悲哀、悲壮、滑稽、洒脱、悲劇的、喜劇的、醜⁴⁶⁾、フモール}の10類型と、調査協力者が全員、環境と文化の観点において東洋に関わりがあると云えることから加えた、民族や文化に特有の「美的範疇」とも解される{幽玄、あはれ、さび[まぶさび]⁴⁷⁾、可愛い}の4類型である。この、合計14類型の各言葉の意味は次の表8に挙げる。なお、表8に掲げた「意味」の作成に際しては、井島勉[1908-1978]が著した『美学』⁴⁸⁾を中心に、各種の辞書や文献を参考にした。

表8 「美的範疇」の各類型の意味

No.	類型	意味
1	崇高	自己保存欲、恐怖、朦朧性、力、空虚、暗黒、[数学的・力学的]無限、苦痛、危険、偉大、巨大なもの、力あるもの、遠くかけ離れているもの、畏怖の念、限界のない無形式、動的な心情、理性性、生命力の一時的な阻止とそれに続く進出による間接的な感情、厳粛な消極的快。
2	優美	社交性、滑らかなもの、繊細なもの、善、調和[秩序、均衡]、脅威、華麗、典雅、壮麗、可憐、艶麗、限界づけられた形式、静的な観照、直接的な生命促進の感情、魅力的な積極的快。
3	悲哀	生命あるものの滅亡の場合のように、もっぱら否定性を基礎とせるその原初的な類型。かなしくあわれなこと。
4	悲壮	辛うじて暴雨に堪える樹木や、大義のために滅びゆく殉教の光景のように、悲哀と崇高とが結合した類型。あわおにまた勇ましいこと。悲しい結果が予想されるにもかかわらず、雄々しい意気込みのあること。
5	滑稽	否定的契機を宿していても、見せかけの威勢が突然とその内実の貧困を暴露したり、張りつめた緊張が期待を裏切って突如として弛緩したりする時。
6	洒脱	俗気を脱してさっぱりとしていること。
7	悲劇的	意外なものの発見は、常に驚きを伴うけれども、同じ驚きであっても、反価値の発見の場合。憐れみと恐れ。幸福から不幸へ向かう。カタルシス、悲壮美。
8	喜劇的	意外なものの発見は、常に驚きを伴うけれども、同じ驚きであっても、無価値の発見の場合。アイロニー、社会批判性、グロテスク、不条理性。
9	醜	美的形成を拒み、作品の内容と形式を乖離させて不快感をもよおさせるもの。
10	フモール	上品な洒落やおかしみ。諧謔。おもしろさと共感とが混じり合った状況。機智や滑稽と同じく笑いを引き起こす。
11	幽玄	明晰には姿を現さぬ無限なものが否定作用の場所となりながら優美をすかさずさす。
12	あはれ [哀れ]	嘆賞・親愛・同情・悲哀などのしみじみした感動。しみじみと趣あるさま。しめやかであるさま。感傷を誘われるさま。はかないさま。慈悲の心。おもしろみ。悲哀、哀愁。深くしみじみと心をひかれる感じ、またそのような感じを起させる状態。情趣深いさま。
13	さび	古びて趣のあること。閑寂なおもむき。閑寂味の洗練されて純芸術化されたもの。閑寂な情調。
14	可愛い	幼さや弱さを感じとり、まもり慈しみたいと思うさま。外見・しぐさ・性格・行動様式などがほほえましく、愛情を感じさせるさま。愛らしい。愛くるしい。

表8の「意味」の記述にも見られる通り「美的範疇論は、個々の質を論ずるのではなく、少なくとも二つ以上の美的概念を相互に関係づけつつ体系的に展開するとき、初めて成立する」⁴⁹⁾とされる。また「美」には「客観的規定」と「主観的規定」があり、前者は「客観的な一般的な特質や構造によって定義

すること」であり、後者は「美しい対象の特徴を規定するのではなく、それを経験する心の特質によって美を定義」することとされるが⁵⁰⁾、翻って見ると「調査1」は、大学生が「美」を、これらの規定の何れとして捉えているかを知る調査とも考えられた。

4-2 「調査1」の分類結果

本節で示す分類結果は、「調査1」において大学生が回答した「実際に経験した『美』に関するエピソード（美しいと感じた場面や出来事、経験等）と、それを『美』と感じる理由」を、「美的対象」と「美的範疇」の各観点から集計した結果である。但し「調査1」の調査協力者は、前述の104人と72人の合計176人であるが、複数の回答をした人が数人居たため、回答数は186個であった。なお、次の表9に示す

「No.」は表8の「No.」に対応するが、図2のグラフにおいて、縦軸に示す「美的範疇」は、上から、表9の左から右に対応して「回答数」の降順に記し、横軸は回答数〔単位：人〕を示す。

表9 「調査1」の回答の分類

No.	2	1	12	13	11	4	9	5	6	7	10	8	3	14
美的範疇	優美	崇高	あはれ	さび	幽玄	悲壮	醜	滑稽	洒脱	悲劇的	フモール	喜劇的	悲哀	可愛い
回答数	78	61	21	11	5	4	2	1	1	1	1	0	0	0

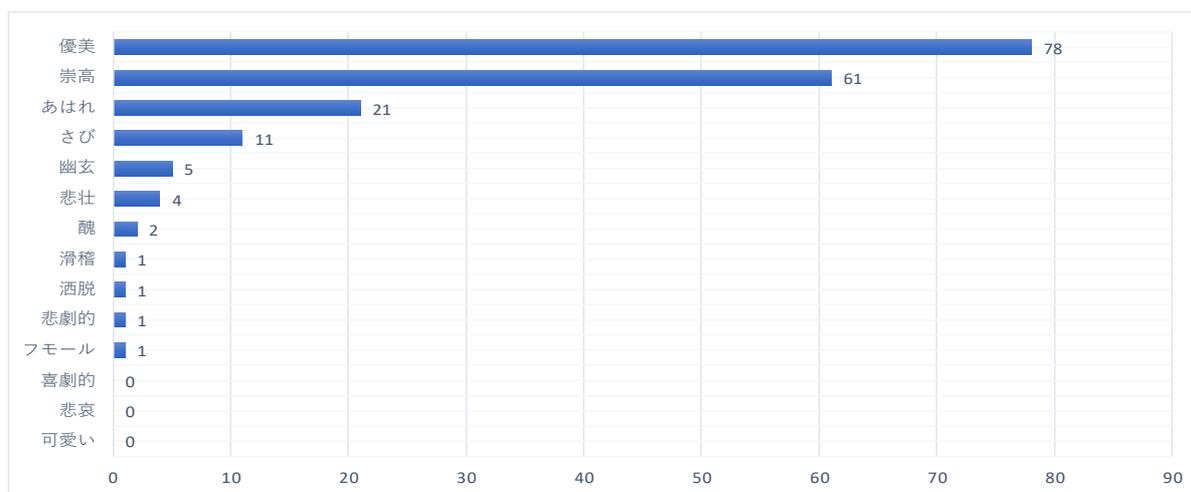


図2 「美的範疇」の出現数

「調査1」の回答において、最も回答数が多かった「美的対象」は{宇宙、空、海、森林、水、死}等の「自然の景色〔現象〕」であり、次が、同じ「景色」ではあるが{生花、神社、プラネタリウム、イルミネーション、建造物、博物館}等の「人工的な景色」であった。更に「{家族、友人、仲間}と見た景色」、{田圃、桜並木、吸光スペクトル、金魚〔蘭鑄]}等の「人為的な景色」が続き、その後には{身体、顔、ダンス、バレエ}等の{身体美、機能美}を示す「人間の身体」、{涙を流す姿、利他的行動、配慮}等の「人間の行為」が現れ、それ以下に{建物、庭、絵画、ポスター、工芸品、彫刻、表現技法〔たらしこみ]}等の「美術作品」、{曲、歌声、合奏、演奏}等の「音楽」、{小説、劇}等の「文学作品」、{黄金分割、フィボナッチ数列}等の「数式」、その他に{コント、試合、化粧品、関係性}や「瞬間」を示す〔初

めて眼鏡を掛けた時、完成されたものが崩れる瞬間、バスが狭い曲がり角を曲がる瞬間}等が挙げられた。他方、全く回答が見られなかったのは{喜劇的、悲哀、可愛い}であった。

4-3 「調査1」の結果の考察

上記の「美的範疇」の結果において、大学生の誰一人「可愛い」を回答に挙げなかった点に関しては、今日、男女問わず、通学鞆にキャラクターのマスコットチャームを付ける大学生が増加している現状から大学生が「可愛い」対象を好まないとは考え難いため、大学生が「可愛い」と「美」とを区別して捉えていると考えられた。また「悲哀」については、それに近い回答はあったものの、どちらかと言うとそれらの回答は「あはれ」に近い感覚であると考えられたため「悲哀」に分類される回答は「0」となった。この結果から{[1] 東洋人は「悲哀」よりも「あはれ」に親近感を持っている、[2] 「あはれ」と「悲哀」とは異なる類型とする必要がある、[3] 「美的範疇」には「あはれ」と「悲哀」のいずれか一方を挙げるのが妥当}等の様な「美的範疇」の個々の類型の関係に関する考察は、更に必要であると考えられた。

なお「喜劇的」の回答数が「0」であった理由の仮説には、(ア)「調査1」の回答において最も記憶に残るエピソードを一つだけ挙げた大学生が多く、そのため、直ぐに思い付く{優美、崇高}に分類される回答が多かったこと、(イ)大学生にとっては「喜劇的」は「美」と捉え難い概念である可能性があること、以上の2種類が考えられた。これらの仮説を検証するためには、例えば、調査方法を変更して複数回答する様にしたり、調査用紙に予め「美的範疇」の類型を全て挙げて、各類型に関する経験を回答する様式にしたりする必要があると思われた。但し{優美、崇高}の割合が、全回答の75%を占めた結果は、大学生が抱く「美」のイメージが、概ね両者に属することを示すと解釈出来る。

「調査1」の結果からは二つの仮説が得られた。その一つは「美」を感知する能力は人類に普遍的な能力として備わること、もう一つは、大学生が持つ「美」のイメージが画一的で多様性を欠いていることである。但し「調査1」を分類する際、予めその存在を仮定した「美」に属さない「その他」に分類される事物の回答は見られず、その点から一つ目の見解は支持され得ると考えられる。では仮に、一つ目の見解を正しいとすれば「美」を図画工作科及び美術科で教える必要は無いということになるが、他方、二つ目の見解を正しいとすれば、現代の学校教育で広く行われている、多様性や創造性に関する指導を充実させた美術教育を行ったとしても「美」の捉え方を広げるのは難しく、それは「美学」自体を学習する必要性を示すと共に、逆説的に、制作から美術史、更には、美学迄含めた「美」全般を教育の主題とする美術教育が、学校教育に必要であるとの根拠を示すとも考えられた。これらの仮説を検証する手始めとしても、上記の変更を加えた調査を実施する意義はあると思われる。

5. 考察及び展開

5-1 結論からの展開の可能性

本論では、大学生の「美」の捉え方を知ることがを目的に調査を行い分析した。その結果、大学生の多くが「美」のイメージを{優美、崇高}と捉え、他の「美」のイメージを持つ大学生は少ない点が明らかになった。更に、今回の調査により、今後調査が必要であると分かったのが、「美的範疇」の{優美、崇高}以外の類型に関しても、大学生が「美」と認識するのかどうかを明らかにする点である。そこで、今後は調査方法を変え、{優美、崇高}以外の「美」の類型の理解が出来ているかどうかを確認する調査が必要と考えられたが、仮に、その結果において{優美、崇高}以外の「美」の類型に関する理解が不足していると確認出来た場合は、現在の美術教育における「美」の指導法を再検討する必要性が生じる。また、その場

合は更に「美的範疇」のみならず「現代の美術」を通して学習する「美的概念」並びにそれに含まれる「美的用語」の理解の程度についても調査を行うことにより、学習者においては、それを機に、現代の「美しくない美術」へも理解を広げることが可能になると考える。即ち、学習者は、こうした調査により、美術を評価する規準が必ずしも美に止まらず、多様な感性を含む「現代の美術」の理解に対する戸惑いを払拭し、美術への更なる探究心を持つ機会を得、他方、調査者は、調査の結果から「美的範疇」と「美的概念」の学習を経た人々が習得する能力について明らかに出来ると考える。

しかし一方で、今回の調査の結果に見られた、大学生の「美」に対する理解は順当であるとも考えられた。それは、シラー [J. C. F. Schiller, 1759-180] が「崇高」概念を論じた『崇高について』が裏付け。『崇高について』においては、芸術が「美と崇高の接点の位置に関連付けられ」、芸術には「運命に対する予防接種」⁵¹⁾としての役割があるとした上で、広義の美と狭義の美である「優美」を区別して⁵²⁾『美(優美)』と『崇高』、両者の内実と関係を詳細に論ずる中で、前者を感性界 (Sinnenwelt)、後者を叡智界 (intelligibele Welt) に属するものとして厳密に区別し [略]『美(優美)』と『崇高』の統合状態 [広義の「美」]こそ到達すべき目標とし⁵³⁾て、統合状態では道徳的世界である「非美的なるもの」を含むとするが、これに基づけば「優美」と「崇高」は他の「美的範疇」とは異なる次元の概念 [上位概念] と言えるためである。

なお、シラーにおいては、教育の使命を「第一に [略] 人間を感性的かつ理性的存在と捉え、両性の調和的な統一に人間性の至高のあり様をみ [略] 感性の虜になっている人間を道徳的に意思するように教育するためには、美的体験が不可欠である」と考える。第二に、美は、美的なものを享受する心そのものが理想の心意状態、人間性の完成の境地であることを教示する⁵⁴⁾と捉え「シラーが意図するところは、道徳的・倫理的教育と美的教育を別々のものと捉えるのではなくて、両教育思想の独自性自立性をそれぞれに尊重しつつ、この両者を調和的・統一的な高まりへと熟成させてゆき、至高の人間的な心の寛容に通じることを説くことにある」⁵⁵⁾と考えていたとされる。このことから「シラーの教育論において美的なものに寄せる心は、感性と理性という存在の二重性を抱える人間として、より高い心意状態へ至るための移行段階であるとともに、至高の心意状態、人間性の頂点でもある。人間の心意状態の発展は、(1)感性的なもの、(2)道徳的なもの、(3)美的なものといった三様の状態を経過する」⁵⁶⁾とされるが、これは前出のキルケゴールが「美的実在」を発展の初段階としたのとは異なる。そこで、次に、先に予告した、キルケゴールが「美的実存」に関して行った解釈を、シラーの「美的」に関する考え方との違いを意識しつつ、それを手掛かりに考える。

5-2 「美的実存」における「美」の概念に基づく展開の可能性

キルケゴールの言う「美的なもの」を対象にした論文は複数あるが、それらの論文から「美的なもの」について記した文章を「/」で区切りつつ記すと {「美的なもの」は} 善にも悪にもなり得る/「美」とは感性的なものであるがゆえに個別的であるが普遍的な理念を求めるという点では理念的なものでもある/倫理のなかに美をみいだした「普遍人間的なもの」にこそ価値がある [倫理の前提となるものは、自らの自由と意志と情熱でもって、永遠の自己を獲得した人間が選択すること] /「倫理的なもの」には美的な人間が持つ極端性を中和させる働きがある/善にも悪にもなりうるどころの「美」を義務によって「善」にする/「美」と「倫理」は関係することで初めて価値あるものとして成立する [そこに「均衡」といわれる意義がある] /美的段階における「美」の特徴は倫理的段階における「美」において生かされていく/美的段階の人間には個の基礎となる真の自己意識が欠けている/人間は美的要素も倫理的要素も両方持っているからこそ人間なのだといっている/「美」それ自体では不完全でありまた「倫理」それ自

体でも不完全／一人の人間の中で美的要素と倫理的要素のどちらか一方が強くても真の人間らしさを失う}等となる。

若松謙の解説に依ると、キルケゴールは『あれか、これか：ある人生の断片』[1843年発表]で「美的なもの及び美的人間」を「人間における美的なものは、それによって彼が直接的に現にあるところのものである。…美的なものにおいて、美的なものによって、そして美的なもののために生きる人が、美的に生きるのである」と定義し、「美的なもの」とは「『人間にその自然的、歴史的制約に基づいて帰属するもの』或いは『人間の現存在に直接与えられた諸事実や、経験的に知覚され得る諸事実、即ち直観ないし自己経験において知覚され得る諸事実』の総体を意味する」が、そうした「美的なもの例」には「①健康、②美（容姿の美しさ）、③欲求の充足（即ち快楽の享受）などの外、さらに④才能（実業であろうと学問、芸術であろうと、あらゆる領域における才能）、⑤富、名声、貴族などの身分」があり、そこから「美的人間」とは「こうした意味での美的なものにたえず関係し、その内のどれかを自らの生の根拠として生きる人、それを生きる究極目標にする人」即ち「美的なものどれかを何よりも重んじて生きる人」となり、そうした「美的人間例」には、「人生を享受する」ために「健康や富を自分の生の根拠とみなし、それを目標にして生きる人」⁵⁷⁾が挙げられるとされる。若松はまた「大衆」は美的実存に包摂されると解し⁵⁸⁾、そのため、キルケゴールの「美的人間」の考え方に基くと「美的な人間にとって、足るを知って生きていくことは、自己の恣意的欲望を満たす妨げになる」⁵⁹⁾と解釈出来るとする。

他方、藤野寛 [1956-] は、キルケゴールが指定した各「実存」について、それを段階として解釈する点を否定し、キルケゴールが「美的実存」を批判した理由を次の様に捉える。

キルケゴールは「美的」をバウムガルテン [Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762] が興した「感性学=美学」[Ästhetik]の基礎を成す「感性的知覚」と捉えた。しかし「感性学」では、カントが「美の経験が快の感情という主観的なものに関係づけられることになって以来」美と単なる快との違いを示す必要に迫られ、見る働きを探究した結果として「純粹視覚性」即ち「観照」「静観」を重視することになった。

「観照」とは、ショーペンハウアー [Arthur Schopenhauer, 1788-1860] に依れば「抽象的な思考、理性の観念などに意識をとられることなく、(……)自分の精神の全力をあげて直観に献じ、直観に完全に没入し、いままさに目の前にみえている自然の対象、これが風景であれ、樹木であれ、一塊の岩であれ、一つの建物であれ、もしくはその他の何であろうとも、この自然の対象を静かに観照することによって意識の全体を満たす」といった「それが感性的な性質のものであるにもかかわらず、思惟に並ぶほどの、あるいはこれを凌駕するほどの、本質洞察という特別の権能が認められる」[『見る(観る)』という認識行為]とされるが、それは「プラトンのイデア論を美の認識の理論として改竄した」捉え方とされる。この「世界の目」になりきるといふショーペンハウアーの「観照」の意味に対してキルケゴールは「観照を可能ならしめるそのような静謐で不動の精神の境地というのは、本当に人間のものでありうるのか」と問い「アリストテレスが神にこそ割り当てた事実にも見てとれるように、人間が自らに要求することは不遜・僭越にあたる、そういう姿勢ではないのか」⁶⁰⁾と考え、そこからキルケゴールは観照を「人が観察せんとするその物に近づくこと。と同時に、別の意味では、その事象を遠ざけること、無限に遠ざけることでもある」とし、「観察することで、私は対象の中に没入する(私は客観的になる)。しかし、私は私自身から抜け出し遠ざかる(私は主観的であることをやめる)」⁶¹⁾と捉えた。即ち「観照」の姿勢はショーペンハウアーが言う「対象の中に没入しそれと一体化しようとする、その意味で、対象との隔たりを無くそうとする」「主客一体 [主客未分]」と、キルケゴールが言う「対象としての世界をもっぱら見つめることで、自らその対象世界の動きに巻き込まれたあり方からは身をふりほどき、その意味では、その世界の出来事の外に出る」「距離を置いて見る」の二義性を示すことになるが、キルケゴールにおいては「観照」により、人間が「自己自身に対する隔たり」を引

き起こし「自己喪失・自己忘却」⁶²⁾に陥る点を重く見て、そうした「観照」者である「美的」な生き方をする人間には「自己自身に対する関係の回復」が必要であり、その意味から「美的実存」を批判する。一方「倫理的実存」については「自己自身を選択」し、「主体的努力の善さを何よりも重んじて生きる」⁶³⁾「倫理的に自分自身を選択する者は、自分自身を課題として有する。可能性、即ち自分の恣意の気紛れのための玩具として、自分自身を有するのではない」⁶⁴⁾と捉える。

以上が、キルケゴールの「美的実存」の概念とその根拠であるが、こうしたキルケゴールの考え方に対して「ハーバート・リードは『芸術による教育』において、『倫理と審美学に対して同一の基礎を見出せる可能性について、シラーは肯定的に論じ、これに反しキルケゴールは否定的に論じている』⁶⁵⁾と述べ、シラー的肯定論に加担することを宣言し」⁶⁶⁾ていると言われる。

以上は、キルケゴールの「美的実存」に関する解釈の一部であるが、そこから多様な「美的実存」の側面が見えた点を鑑みれば、「美」の意味自体は元より、今後はキルケゴールの分類に倣って「美と崇高」「広義の美と狭義の美〔優美〕」「崇高と道徳・倫理」等の関係についても、更に考察を深める必要があると考えられた。またそうした考察により、法則的指導や自由放任的指導といった極端な美術教育指導法が併存する現状の理由や、両者が共存し止揚し合う指導法を考案し得る可能性、加えて、長らく記載が変わらない美術教育に関する学習指導要領の文章について、各文章が初めて書かれた時点での、その文章に籠められた美学に基づく正確な意図等を明らかに出来ると考える。

6. おわりに

本論を終えるに当たり、本研究に類する、先に示した以外の研究例を挙げる。それは {[1] 日本人若年女性の「人間の外見」と「内面の美しさ」の捉え方に関する調査⁶⁷⁾、[2] 「日本人の感性（美意識）の変化」に関わり「日本人が昔から持つ感性（美意識）」を調査した国土交通省の「国民意識調査」⁶⁸⁾、[3] 色彩感情に関して、造形的な刺激と色見本を被験者に提示し、評定用語の中から各刺激から受ける印象に該当する用語を選択する調査の結果「色には emotion、behavior、nature が、立体には gestalt と nature の各質が関与している」点を明らかにした研究⁶⁹⁾} 等である。

その他、美術教育で美意識を育む方法の研究もあるが、この研究では、美意識について「何をもって『美』と感ずるかは個によって違う主観的なものである。同じ現象であっても受け止める側によってそれが美であることも、そうでないこともある。つまり、美意識とは個々によって異なる『美的な価値観』と言い換えることができる」⁷⁰⁾と記し、そこから美意識を普遍的な性質の「美」としてよりも、個人に由来する「快」として捉えていると解釈出来る。しかし、こうした美意識の育成法に関する研究においては、予め、美意識に関わる「美の定義」について歴史や共通理解を踏まえる必要があると言える。

また、上記の研究例の [3] に挙げた、色彩感情に関する研究が記す所では、造形作品の心理的効果を調査するのに用いる「用語」を作成する際、先ず、実験美学や心理学的な方法論に基づく因子を検討した所、{評価性（快い・美しい）、活動性（動的な・派手な）、力量性（強い・思い）} の3因子～6因子が見出されたものの、これらの因子では決定的な基本次元が抽出されないと判断し、最終的には、美を説明する用語である「美的質」を参照し、その中からヘルメレン〔Göran Hermerén, 1938-〕が挙げた、次頁の表10に示す6種類の質及び各質に含まれる具体例の100語を用いたとされる⁷¹⁾。

但し、表10に挙げた「美的質」の6種類は全て、対象の中に存在する3種類の「質」の中の1種とされ、その他の2種は、ロックが提唱した{第1性質：実在的な質、第2性質：感覚的な質}であり、これらの関係は、後者は前者に属する「力能 (power)」で、前者の構成に基づいて現象する質であり、更に、

美的質は、これらの第1性質及び第2性質の特殊な構成に基づいて現象して来る質とされる⁷²⁾。

上記の、第1性質～第3性質の解説と例は表11に示す通りである。但し、第2性質と第3性質との境界は画然とせず、そのため、第3性質である「美的質」が、第2性質の「感覚的質」と混同されると言われもする⁷³⁾。なお、この混同は、現行学習指導要領に掲載される「共通事項」に挙げられる「イメージ」に関して、特に、小学校で、第1性質や第2性質を示す形容詞を、表現における「参考資料」に挙げて指導を行っている現代の教育現場においても見られる。

表10 ヘルメレンが提示した「美的質」⁷⁴⁾

美的質	具体例
情緒的な質 [emotion qualities]	陰気な、厳粛な、晴れやかな、センチメンタルな、陽気な、熱狂的な、等々。
行動の質 [behavior qualities]	大胆な、神経質な、力強い、激しい、熱烈な、いらいらした、控えめな、優美な、寛いだ、優しい、仰々しい、堅苦しい、等々。
形態の質 [gestalt qualities]	統一のある、ばらばらの、首尾一貫した、緊密な、単純な、均衡のとれた、調和的な、混沌とした、等々。
趣味の質 [taste qualities]	エレガントな、愉快的な、どぎつい、けばけばしい、ピクチャレスク、崇高な、美しい、キッチュ、不細工な、卑俗な、醜い、等々。
反応の質 [reaction qualities]	可笑しい、滑稽な、驚くべき、かわい、衝撃的な、挑発的な、神秘的な、印象的な、等々。
自然の質 [自然の中に見出される質] [nature qualities]	冷たい、温かい、静か、輝かしい、深い、柔らかい、等々。

表11 第1性質～第3性質の「解説・例」

性質	解説	例
第1性質	対象の中に確かに存在する実在的な質	かさ [嵩]、形、数、位置、運動/静止
第2性質	第1性質が感官をとおして生み出す観念 [感覚的な質]	色、音、匂い、味
第3性質	第1性質・第2性質を前提とし、それに依存するより高次の性質	特定の形や構図、色彩などの客観的な質の合力

これ迄見て来た通り、美学においては、人間が捉える「美」を言葉や概念を通して探究する。しかし、新しい学問である「神経美学」⁷⁵⁾では、近年の脳科学の進展もあり、知覚・認知と美学的体験との関係を研究し、刺激への反応の背後にある神経活動との関係性を説明することで、複雑な感性的体験の共通の要素を見付け、多様な感性的体験を定式化しようとしているとされる⁷⁶⁾。この「神経美学」と呼ばれる、芸術と感性に関する認知神経科学・心理学では「脳機能測定と実験心理学による定量的手法を駆使して、わたしたちの芸術的活動（作品の知覚、表現技法、価値づけ、芸術的創造性など）と認知プロセスとの関係、また感性的な体験・評価（美醜、感動、崇高・畏敬など）と脳の働きとの関係」の解明を目指す⁷⁷⁾が、医学の進展に伴い、将来は、こうした「神経美学」において、過去の研究者が唱えた「美」に関する理論が検証され、新たな発見を齎すと思われる。ただ、それ迄は、遅々と進めるしかなく、そのためには、過去の研究者が蓄積して来た「美学」の考察の成果と、現代を生きる人々の「感性」を「美術教育」の観点から探りつつ、より確かな方針を見出す必要があると考える。

注

1. 「東京大学授業カタログ」〈<https://catalog.he.u-tokyo.ac.jp/detail?code=31413&year=2021>〉 [参照：2022-07-11] .
2. 小牧元「e-ヘルスネット」厚生労働省、〈<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-04->

- 006.html#:~:text=失感情症(アレキシサイ,> [参照: 2022-07-11] .
3. 「ウユニ塩湖」は、ベストセラーとなった書籍の元となり現在も続く Web 上のページを作成した作者が、書籍『死ぬまでに行きたい! 世界の絶景』で「これまで見たなかでいちばんの絶景」として紹介したことで知られる [詩歩『死ぬまでに行きたい! 世界の絶景』三オブックス, 2013, p. 11, <<https://zekkei-project.com/>> [参照: 2022-08-17]]。
 4. 「美的質 [aesthetic qualities]」とも言う [佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会, 1995, p. 157]。
 5. 佐々木健一『美学への招待 増補版』中央公論新社, 2019, p. 108.
 6. 同上.
 7. 五十嵐嘉晴「美的カテゴリーとしての“詩的なもの”」『金沢美術工芸大学紀要』38, 1994, p. 29.
 8. 利光功「美的範疇としてのピクチャレスク」『美学』36(2), 1985, p. 1.
 9. 18 世紀中頃、広まり始めた旅行により、生の自然に触れ「美とは言えない威容に開眼し」これを「崇高」と呼んだとされる [前掲 5, p. 16]。
 10. 前掲 8, p. 1.
 11. 前掲 5, p. 16.
 12. レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた《ウィトルーウィウスの人体図》で知られる通り、ウィトルーウィウスが紀元前 20 年頃に執筆した『建築について』[建築十書]にも「美的範疇」に関する記述はある。しかも「人体のプロポーションを建築に譬えたり、柱にジェンダーという概念を当てはめて 3 つの様式を持つ性格を説明したり、また、モジュール・システムを用いて建築全体を制御したりする発想は、ウィトルーウィウスの創造ではなく、既に他国の建築文化における伝統であった」とされる [安岡義文「ウィトルーウィウスの『建築十書』の記述にみられる建築思想と周辺建築文化との関連性について: 古代エジプトの建築関連資料との比較分析を中心に」『日本建築学会計画系論文集』82(736), 2017, p. 1586]。なお、リオネロ・ヴェントゥーリ [Lionello Venturi, 1885-1961] は『美術批評史』[辻茂 [訳] 第 2 版, みすず書房, 1971, pp. 51-52] で、古代の建築理念を紹介する論文の著者としてウィトルーウィウスを取り上げている。
 13. 牛枝恵「中国の美的範疇論: 『中和の美』の説」『哲学』98, 1995, p. 28.
 14. 牛枝恵「中国の美的範疇論: 『気韻』の説」『哲学』99, 1995, p. 75.
 15. 謝赫 [中国南北朝時代/画家・評論家] が論じた「画の六法」の第一に挙げられたのが「気韻生動」であり、これは「靈的な興を旨とし、「他の再現的・構成的な画法と対比され」と言われる [佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会, 1995, p. 64]。
 16. 但し「佻び」は「美的範疇」では無く「美意識」や「美的理念」とする見解がある。
 17. 多田道太郎 [1924-2007] が「日本の美意識の基本構造をあきらかにした名著」と評した『「いき」の構造』で、その著者、九鬼周造 [1888-1941] は「いき」を現象として捉え、それは「我が国の文化を特色付けている道徳的理想主義と宗教的非現実性との形相因によって、質料因たる媚態が自己の存在実現を完成したもの」 [p. 31] であり「意味を他の主要なる類似意味と区別することができ [略] 単に意味としての客観性を有するのみならず、趣味として価値判断の主体および客体となることが暗示された」 [p. 47] と述べる。また九鬼は、自ら作成した「風流正八面体」 [p. 133] の図を同書に掲載し、その構造を {上品/下品、派手/地味、意気/野暮、甘味/渋味} を各々対角線上に置き、個々を頂点に置いた「直六面体 [立方体]」 [pp. 48-49] で表した。更にこの図を用いて {さび、雅、味、乙、きざ、いろっぽさ [coquet], chic [粋、乙、渋い], raffiné [上品、高雅、瀟洒]} 等も示し「この直六面体の図式的価値は、他の同系統の趣味がこの六面体の表面および内部の一定点に配置され得る可能性と函数的関係をもっている」 [p. 53] と述べた。九鬼は更に「風流の生む美的価値の本質的構造は三組の対立関係に還元される。『華やかなもの』と『寂びたもの』とが一組、『太いもの』と『細いもの』が一組、『厳かなもの』と『可笑しいもの』とが一組である」 [p. 126] と述べ、加えて「情緒の系図」 [p. 215] も作成し「派生的な情緒は省略し」 [p. 214]、主要な情緒は 10 種 {嬉、悲、愛、憎、恐、怒、恋、欲、寂、驚} で「下部には、『嬉』『悲』『愛』『憎』を四つの中心として、快不快の感情が多様に展開している。『恐』と『怒』とは動物進化上に意義のある本能的情緒と言ってよいであろう。『寂』『哀』『憐』『愛』『恋』をつなぐ線が、特に人間学的重要性をもっていることは、看過してはならない。個性性の『寂』と有限性の『哀』とが論理的関係にあること、主観的な『哀』と客観的な『憐』とが相制約し合うこと、『愛』が自己否定的な『憐』(アガペ)と自己肯定的な『恋』(エロス)との二方向を弁証法的に内含していること、有的な『恋』の裏につねに無的な『寂』が基礎づけをしていること、等はこの図によっておのずから明らかであろう」 [p. 216] と述べた。なお九鬼は、これらの論の展開に際して {デカルト [René Descartes, 1596-1650]、スピノザ [Baruch de Spinoza, 1632-1677]、ジョルジュ・デュマ [Georges Dumas, 1866-1946]、プラトン [Plátōn, 紀元前 427-紀元前 347]} 等の情念論を引きつつ行った。
 18. 新村出『広辞苑』第 7 版, 岩波書店, 2018.
 19. 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館, 2014.
 20. 美学会編『美学の事典』丸善出版, 2020.
 21. 松崎俊之「美的カテゴリー: 美的特性論への展開と日常の美的カテゴリーへの展開」美学会編『美学の事典』丸善出版, 2020, p. 110.

22. 前掲 5, p. 21.
23. 『美学への招待 増補版』では「芸術」を「藝術」と記し、学習指導要領が「鑑賞」と記す内容は「観賞」と記されている。
24. 前掲 5, p. 22.
25. 「美的範疇」に関する議論のその後の展開については「ロマン主義的ドイツ美学を通じて、フモール (Humor) が重要な価値を有する美的カテゴリーとされ、20 世紀中葉には西欧では 66 種の美的価値を数え挙げるところまで行きつき、大西克禮氏が〈幽玄〉、〈あはれ〉、〈さび〉等を派生的「美的範疇」として考究するなど、美的カテゴリーの細分化が進んでいる」〔前掲 7, p. 30〕とも言われる。但し、この文章では「美的範疇」を「美的価値」とするため「美的概念」と「美的範疇」とを同一視していると考えられる。
26. 次の卒業論文に、大学生の視点に基づく「やばい」に関する考察がある。〔熊谷愛未『『やばい』の現状とコミュニケーション：私たちは『やばい』をどう使うべきなのか』<file:///Users/celeritas/Downloads/atom_i_com8_21.pdf> [参照：2022-08-10] .〕
27. 前掲 19.
28. 『デジタル大辞泉』小学館。
29. 次のキャンペーンにおける「ヤバい」への投稿から選ばれた優秀作品より作成。〔『あなたの言葉を辞書に載せよう。2015』キャンペーン『デジタル大辞泉』小学館、<https://kotobank.jp/word/やばい-400880> [参照：2022-08-10] .〕
30. 「やばい」の類義語には {可愛い、美しい、綺麗だ、凄い、楽しい、嬉しい、悲しい、感動する、面白い、格好いい} が挙げられる。
31. 感性工学の分野では、共通する感性の存在を前提に研究がなされ、コニカミノルタが開発した「人の感性をデジタルで再現し、『刺さる』デザインを判断できる技術」では「脳科学をもとに、チラシやウェブサイトといった広告のデザインの色や形などから人が感じる印象や注目度を解析。消費者の購買などにつながりやすい最適なデザインを提案する」と言う〔為廣剛「コニカミノルタ、広告の印象解析：感性可視化 消費を刺激」『日本経済新聞』2022/08/25 [木]〕。
32. 林伸一『『省略する文化』と『明示する文化』：日本事情論としての考察』『山口大學文學會志』64, 2014, p. 130.
33. 「美的実在」という言葉もある。これは「美的概念/美的質」を援用して作品批評を展開し『『芸術とは何か』』『美とは何か』といった範疇論・形而上学を得意とする』分析美学において、作品に「美的概念」が実在するか否かを論じる際に「美的実在論/美的反実在論」として用いられる〔田邊健太郎「美的実在論の現代的論点に関する一考察：ニック・ザンウィルの議論に焦点を当てて」『Core Ethics』9, 2013, p. 141〕。
なお現在、学校教育において展開されるフェルドマン [Edmund Burke Feldman, 1924-] 等の論に基づく「美術批評」が分析美学を背景にしていることについては、分析美学が対象とする研究領域が、ピアズリー [Monroe Beardsley, 1985-1985] の考えに基づけば {①芸術の定義、②芸術の存在論、③美的性質 [美的質]、④意味とメタファー、⑤再現、⑥表現、⑦虚構、⑧文学の解釈、⑨理由と判断、⑩美的価値} であり「この 10 個の領域は、順に基礎研究から応用研究へというスペクトルをなしており、大まかに①～③が「記述」、③～⑨が「解釈」、⑨～⑩が「評価」を研究対象としている」と言われる点から分かる〔三浦俊彦「分析美学：20 世紀後半からの新たな流れ」美学会編『美学の事典』丸善出版, 2020, p. 25〕。
34. 「青空文庫」約 12,000 作品を対象に、品詞を分別して示す「日本語コロケーション辞典」では、「美的」を有する「複合名詞」に、次の様な言葉 [一部改変] が見られた。
{美的判断、美的反省的判断、美的反省、美的感情、暫時美的感情、美的感情教育、美的教育、美的感情移入、美的生活、美的生活論、美的態度、美的享樂、美的狩獵、美的同情、美的教養、美的鑑賞、美的精神、美的基準、美的本能、美的意匠、美的淘汰、美的世界觀、美的効果、美的要求、美的裝飾、美的考慮、美的価値、美的価値論、美的印象、美的需要、美的受容、美的趣味、美的情緒、美的情操、美的真理、美的法則、美的表現、美的律動、美的主觀、美的模範、美的嫌惡、美的感官技術、美的感覺、美的共通感覺、美的表示、美的特徴、美的感動、美的理想、美的陶醉、没我的美的陶醉、美的理性、美的思想、美的方面、美的条件、外面的美的条件、美的要素、美的魅力、美的宗教的、美的情感、美的幻影、美的内容、美的形式、美的意図、美的生命、美的行爲、自然美的觀照、美的源泉、美的直覺、美的觀念、美的關係、美的秩序、美的構造、美的娛樂、美的創造物、美的姿勢、美的快感、美的考察、美的假象、美的富、美的小説、美的必要、美的配合、美的調和、美的認識、美的芸術、美的形態、美的裝幀、美的觀想、美的傳統、美的法悦、美的不可思議、美的空想、美的精進} [<https://collocation.hyogen.info/word/美的> [参照：2022-08-14] .〕
35. 井奈波良一「打ち揚げ花火と健康」『日健医誌』20(4), 2012, p. 215.
36. デイドロ [著], 鷲見洋一・井田尚 [監修]『デイドロ著作集 第 4 卷 美学・美術』法政大学出版局, 2013, p. 25.
37. 前掲 36, p. 30.
38. 前掲 36, p. 31.
39. 前掲 36, p. 28.
40. 「優美」に関しては、シラーが哲学的考察を行ったとされる〔佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会,

- 1995, p. 158].
41. 「20世紀も後半になるといわゆる分析美学の陣営から新たに美的特性論が現れるが、その嚆矢となるのが F. シブリーの 1959 年の論文『美的概念』である。美的範疇論と美的特性論との間に学説史上の直接的な関係は認められないが、しかし見方によっては美的範疇論の破綻が美的特性論への道を拓いたともいえる」との解説がある。〔前掲 21, p. 110.〕
 42. 前掲 21, pp. 110-111.
 43. 前掲 21, p. 111.
 44. 青木孝夫「美的カテゴリー：美的特性論への展開と日常の美的カテゴリーへの展開」美学会編『美学の事典』丸善出版, 2020, pp. 112-113.
 45. アリストテレス〔著〕, 松本仁助・岡道男〔訳〕『アリストテレス 詩学・ホラーティウス 詩論』岩波書店, 1997, pp. 27-28.
 46. ウンベルト・エーコ [Umberto Eco, 1932-2016] には『美の歴史』と『醜の歴史』の著書があり、後者では、諸芸術に見られる {受難、恐怖、驚異、風刺、醜悪、滑稽、不気味、キツチュ} 等のテーマを取り上げ、その序論でエーコは、美の歴史と醜の歴史に共通する点として「普通の人の趣味が同時代の美術家たちの趣味とある程度一致している」と述べている [U. エーコ [著], 川野美也子 [訳]『醜の歴史』東洋書林, 2009]。
 47. 篠原資明 [1950-] による、まぶしさとさびしさを掛け合わせた造語 [内藤まりこ「【報告】UTCP 日本思想セミナー『美的カテゴリーの過去と現在』 2009-01-17, <<https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2009/01/report-utcp-seminar-on-japanes-2/>> [参照: 2022-08-12]」。なお、京都大学総合博物館では「平成 22 年度特別展 まぶさび展」が開催された [<<https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/special/content0021/>> [参照: 2022-08-12]]。
 48. 井島勉『美学』創文社, 1958, pp. 133-135.
 49. 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会, 1995, p. 158.
 50. 前掲 49, pp. 13-14.
 51. 中村美智太郎「シラーにおける美と崇高：美的教育と近代的主体形成の問題 要旨」一橋大学大学院言語社会研究科, 2012, p. 3.
 52. 井藤元「シラー美的教育論をめぐる諸論の包越に向けて：『美的書簡』批判の四類型」『東京大学大学院教育学研究科紀要』47, 2008, p. 5.
 53. 同上.
 54. 松山雄三「Fr. シラーの教育論について：道徳的教育と美的教育」『プロテウス』11, 2009, p. 3.
 55. 前掲 54, p. 5.
 56. 前掲 54, p. 6.
 57. 若松謙「キルケゴールにおける美的実存」『奈良教育大学紀要 (人文・社会科学)』34(1), 1985, p. 88.
 58. 前掲 57, p. 102.
 59. 宮澤幸恵「キルケゴール『あれか、これか』における『美的なもの』と『倫理的なもの』の関係」『創価大学大学院紀要』33, 2011, p. 218.
 60. 藤野寛「ショーペンハウアーの美学とキルケゴールの実存倫理：一つの『あれか／これか』」『哲学』48, 1997, p. 252.
 61. 前掲 60, pp. 253-254.
 62. 前掲 60, p. 254.
 63. 前掲 57, p. 89.
 64. 前掲 57, p. 96.
 65. Herbert Read, 1970: *Education through Art*, Faber and Faber, London, p. 268.
 66. 前掲 52, p. 7.
 67. 山田雅子「外見の美しさと内面の美しさ：外見／内面の重視と美しさの捉え方の特徴」『埼玉女子短期大学紀要』30, 2014, pp. 95-108, <<https://core.ac.uk/download/pdf/267897438.pdf>> [参照: 2022-08-13] .
 68. 国土交通省「第 3 節 日本人の感性 (美意識) の変化」『令和元年版 国土交通白書』2019, <<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h30/hakusho/r01/pdf/np101300.pdf>> [参照: 2022-08-13] .
 69. 北嶋秀子・近江源太郎「美的概念に関する定量的検証 (第 36 回全国大会要旨集)」『日本色彩学会誌』29(SUPPLEMENT), 2005, pp. 72-73.
 70. 吉川和生 他「美意識を育むためのタキシノミーテーブルの開発実践：メタ認知領域に焦点を当てて」『学部・附属学校共同研究紀要』41, 2013, p. 151.
 71. 鑑賞能力の判定のためにヘルメレンの美的質を用いた一連の研究がある [立原慶一「フェルメール作『手紙を読む女』と『牛乳を注ぐ女』の比較鑑賞論：美的特性及び主題の感受を中心に」『美術教育学』36, 2015, pp. 279-293 他]。
 72. 前掲 49, p. 159.
 73. 前掲 49, p. 160.

74. 前掲 49, pp. 157-163.
75. 19 世紀末頃にフェヒナー〔Gustav Theodor Fechner, 1801-1887〕が開始した「実験美学」に端を発するとされる〔石津智大「美の認知神経科学, 神経美学のこれまで」『心理学ワールド』2018 年 4 月号 <<https://psych.or.jp/publication/world081/pw06/>> [参照: 2022-08-18]]。
76. 過去の論文において既に「美の認知に関する研究は、古代ギリシャ哲学の時代から 2000 年以上にわたって続く壮大な研究分野だ。一方で、機能的脳画像を用いた研究手法は盛んに用いられる様になってまだ 20 年足らずだが、その発展は目まぐるしい。その 2 つを組み合わせた『神経美学』は今後の展開が期待されている」と記されている〔川畑秀明「美の認知」『認知神経科学』13(1), 2011, p. 87〕。
77. 石津智大「神経美学・芸術心理学研究室」<https://wps.itc.kansai-u.ac.jp/psy/laboratories/arts-euroaesthetics-lab/?doing_wp_cron=1660404060.6414139270782470703125> [参照: 2022-08-14] .

謝辞

本研究の一部は JSPS 科研費 21K02430 の助成を受けたものである。

付録

本文中に使用する丸括弧は引用文であり、筆者が挿入する際は亀甲括弧若しくは山括弧等を使用し、同種の内容を複数並列する際は波括弧を用いる。

(2022年9月30日提出)

(2022年11月7日受理)